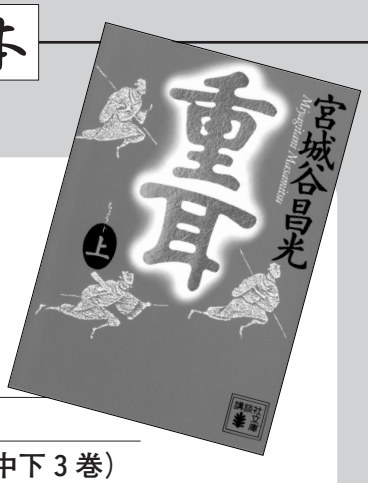
私の心に残った本

『徳』を積むこと

医学部教授
（薬理学）
近藤　一直



「重耳」
宮城谷昌光 著
（講談社文庫・上中下３巻）

書き出しが良い：

「口をあけると、その者は晋人（しんひと）であることがわかる。歯が黄色いからである。」

－この稿を執筆中のまさに今現在も、名古屋の空を白く白く煙らせている粉塵。その、黄砂の源である黄土高原を舞台として描かれる本書は、もともと歴史小説に関心の高かった私が齢四十を過ぎてから初めて、古代中国史に興味を示すきっかけを与えてくれた。作者・宮城谷昌光が地元蒲郡の出身であることも、特に注目した理由の一つかもしれないが、何よりも「太古の昔を生きていた筈の登場人物たちが、恰（あたか）もすぐ眼の前を今、駆け抜けて行くかの様な」躍動感。その活き活きとした文体が、彼の師匠とも称される故・司馬遼太郎を彷彿とさせる。

【時は群雄が割拠し、有力国が目まぐるしく入れ替わる（古代中国の）戦国時代。主家を滅ぼし、領地を拡大していく称（主人公・重耳の祖父）は、その革命的な性格が織田信長を回想させる。一方、一とたび国を追われ19年にも及ぶ長い長い放浪生活を耐え抜いた末、最終的に覇者・文公として名誉を得る孫の重耳自身には、多くの良臣に囲まれその意見によく耳を傾けたことからも、徳川家康の姿が重なる。さらに重耳が華美を嫌い、質素な服装を通した事なども、やはり吝嗇家として知られた家康を思わせる。】

私が宮城谷作品にここまで惹かれる理由というものを再び考えてみるに、彼の作品は単なる事実の羅列や歴史解釈だけではなく、登場人物の人となりを実に細やかに描き出すことによって、我々に向けいくつもの教訓を（然もさらりとさり気無く、嫌味を感じられない程に）発信しているからではないだろうか。その中で繰り返し触れられる思想は『徳を積む』ということ：

－嘗てこれと同じ様に、我々が殆ど忘れかけていた頃、衝撃的に世に復活し一世を風靡した言葉があった－

「品格」；藤原正彦によって発掘されたこの美しい日本語と並んで、私には「徳」という考え方がいま一定の重みをもって、心にのしかかっている。

【流亡時代の重耳を冷遇した、蒙昧な君主たちは歴史の大河の中に藻屑と消えてゆき、一方みすぼらしい外見の裏側に重耳の魅力を見出した君主たちは、名君として後世にまで名を残す。】

のちに名君と呼ばれることになるこれらの人々は、垣間見えた重耳の人となりを見過ごすことなく、不遇な彼を厚遇するという形によって「徳」を積んだ訳である。では、別に王者たる野心を持ち合わせない私達にも、彼らと同じ心掛けが必要だとするならば、一体何をしたら良いものだろうか？勿論、私はこの難しい疑問に対する答えを持ち合わせてはいない。強いて言うなら、いつもは渡り廊下伝いに３階から行き来する生涯教育研修センター１号館に地上から迷い込んだ折、目に留まったもの；

－総長が遺した、我慢人形と祈り人形－

重耳の「重」とは、先祖を祀る廟に据えられた木の人形のこと。彼は堂々たる体格であったとのことだから、きっと祈り人形の様に福々しくどっしりした姿だったのではないか。その重耳が流亡生活の中で痩せ細る様な思いをしながら耐えに耐え、まさに我慢人形の様な渋い面持ちが続いていた、と想像に難くない。その重耳も、きっと折に触れて祈りの気持ちを忘れたことはなかったに違いない、と信じたい。

最後に、私が斯くも気に入ったこの作品を是非一読されることを、皆さんにもお勧めしたいのは山々なのだが、困ったことにこの作家の傾向として、前置きが結構長い。早く出て来て欲しい主人公や肝心な人たちも、なかなか姿を現さないのが珠にキズである。堪え切れず中途で投げ出してしまうことなく、読み続ける「我慢」がどこまで続くものか。当の宮城谷氏は19年に及ぶ放浪を続けた重耳を描き切るために、何と13年もの歳月をかけたらしい。

－第44回・芸術選奨文部大臣賞　受賞作品（1994年）－

（当館所蔵 請求記号913/Juj/(1),913/Juj/(2),913/Juj/(3)）